

## 博士論文全文の要約

### 和辻哲郎の日本人論とその周辺―風土考以前から日本精神考へ―

本論文は、序論、本論2部、結論、付録からなり、和辻哲郎の日本人論を先人及び同時代人の日本人論と比較して、その特徴を明らかにする。そして、風土考以前の日本人論が、日本精神考以降どう変化したのかを跡づけるとともに、日本精神と「間柄」の倫理との関係を考察して、和辻の真意がどこにあるのかを探る。

序論は、まず、人間存在を「間柄」として規定し、そこに「正直」や「まこと」などの倫理の根本を見いだす和辻倫理学の立場を確認する。そのうえで、日本文化論者としての和辻に焦点を当て、先人や同時代人の日本人論と比較して、和辻の日本人論の特質を明らかにすることが、本論文の目的であることを示す。

本論の第一部は、第1章から第4章までの四章からなり、和辻以前の日本人論を扱う。第1章では、明治期から第二次大戦前までの日本人論ブームの背景を概説する。すなわち、明治20年代に明治政府の欧化主義への反発から国粹保存主義が生じ、明治30年代には対ロシア外交から日本主義が生じ、明治末期の第一次大戦前には、儒教を柱とする復古主義的な国民道徳論が生じ、昭和10年代に日本主義や日本精神論が最盛期を迎えたことを述べる。また、岡倉天心、新渡戸稲造、内村鑑三の海外向けの日本人論が、芳賀や和辻の日本人論に対して、いかなる先駆的役割を果たしたのかを明らかにする。

第2章は、三宅雪嶺の『真善美日本人』と『偽悪醜日本人』を取り上げる。雪嶺は、ここで日本の現状と能力、日本人の長所と短所を見極めたうえで、現在できること将来実現すべきこととを分けて論じる。彼は日本人を、日本国家を形成する分子、日本のために自身の能力を発揮する任務を負う人として規定し、その真善美の特質を義理究明、正義の遵守、心眼の練磨に見いだし、その偽悪醜の特質を学术界の腐敗、紳商の跋扈、重外軽内に見い出す。和辻との関連で言えば、雪嶺が紳商と対比させて「士風」を提唱している点が重要である。

第3章は、志賀重昂の『日本風景論』を取り上げる。本書は日清戦争が始まる1894年に出版され、その後も重版された。志賀は、イギリス、イタリア、中国、韓国などの外国の風景と比べながら、日本風景の特徴を「瀟洒」「美」「跌宕」として記す。そして、彼は環境決定論の立場から、日本風景が日本人の性格形成にいかなる影響を与えているかを示す。その際に、日本人のあるべき性格は、桜花のような「たおやめぶり」ではなく、松柏のような意志堅固、剛直、豪気な「ますらおぶり」として規定する。その日本人論は、雪嶺よりもいっそう過激である。

第4章は、芳賀矢一の『国民性十論』を取り上げる。本書は1907年に出版され、国内

外で大きな反響を呼んだ。これは日本の国民性を全面的に論じたものとして、後世の日本人論の雛型にもなった。芳賀は、ここで「忠君愛国」「祖先を崇び家名を重んず」「現実的・实际的」「草木を愛し自然を喜ぶ」「楽天洒落」「淡泊瀟洒」「繊麗繊巧」「清浄潔白」「礼節作法」「温和寛恕」の十個のそれぞれの観点から日本人論を展開する。その叙述内容を明らかにして、和辻の日本人論との接点を探る。

本論の第二部は、第 5 章から第 12 章までの八章からなり、和辻哲郎の日本人論を中心に扱う。第 5 章は、日本文化論者以前の日本人論として、『偶像再興』の中の「日本は何を誇るか」という評論を取り上げる。和辻は、最初に、近代日本の勃興の原因を日本人の気質に帰しつつも、「恬淡」や「淡泊」のような気質は、長所もあれば短所もあると指摘する。そして、日本魂を民族と文化の警語として見ることに反対し、国学者の本居宣長を「狂信家」と評する。また、彼は、古代インドと中国を日本文化の源流として認めるだけでなく、西欧の文化をも日本の「精神上の祖先」として認める。つまり、この時期の和辻の文化観は、東洋文化と西洋文化のそれぞれよいところを吸収する折衷主義の立場である。

第 6 章は、『日本古代文化』の中の日本人論を取り上げる。和辻は、ここで、記紀を素材にして古代日本人の特性や心情を解明する。まず、古代日本人は優れた想像力によって「原始芸術の美しさ」を生み出したが、その想像力にも弱点があるとする。次に、彼らは「子供らしさ」の特性を持つが、それは、一方でエゴイストであり、他方で「優しい心の愛他者」であって、道徳的な意味での善悪にうとく、「つみ」に対して穢れがないと指摘する。さらに、彼らは、未開人の心性に似た、素朴な純粋な宗教心を持っていたとする。こうして和辻は、古代日本人の心性のうちに日本人論の典型を見いだす。

第 7 章は『風土』の日本人論を取り上げる。まず、「風土」の字義を明らかにし、そのうえで和辻風土論の方法に言及する。和辻の言う風土は、単なる自然環境ではなく、人間存在の自己了解の仕方である。彼は、風土類型として、受容的・忍従的なモンスーン、戦闘的・服従的な砂漠、温和的・従順的な牧場の三つを挙げる。日本人は、モンスーン的な性格に加えて、台風的な性格と大雪・大雨的な性格を併せ持ち、「しめやかな激情」と「戦闘的恬淡」の二重性格を持つ。彼は、こうした日本人の特性を、記紀における恋愛譚、家族における「間柄」、「うち」と「そと」などによって例証する。この観点の一部は芳賀や久松潜一の日本人論とも重なる。

第 8 章は、『続日本精神史研究』の中の「日本精神」(＝日本精神考)を取り上げる。まず、和辻の「精神」が、「たましひ」や「こころ」などの一般的用法と異なり、日本固有の伝統や国民性の自覚を表すことを明らかにする。和辻は、日本精神は中立的なもので、発露によって「あらわ」となり、「伝統的なもの」として日本民族の存続発展に伴って発展するので、日本精神は重層的な日本文化を通じて歴史的風土的に把捉されなければならないとする。この主張から、当時の日本精神ブームに対して、和辻なりに抵抗の痕が伺われる。

第 9 章は、『続日本精神史研究』の中の「現代日本と町人根性」という論文を取り上げ

る。まず、和辻の近代日本観を明らかにする。彼によれば、近代日本が世界史に登場した時期は欧米列強の帝国主義化の時期とちょうど重なり、欧米列強が資本主義の経済的發展を背景にしているのに対して、日本は十分な資本主義的な發展段階を遂げないうちに、ただ「衝動的な国民的憤慨」や「国民的矜持」でもって日清日露に突入し、その後急速に資本主義を遂げたとされる。そのうえで、彼は、町人の出現に伴って「私利」を絶対目的とする「町人根性」が芽生え、これが明治期に功利主義道徳によって根拠づけられて実学となり、ブルジョア精神と結びついたとする。そして、これにより近代日本人は「私利」の追求に奔走し、全体社会に対する犠牲的態度を喪失したとして、「町人根性」の危険性を指摘する。

第 10 章は「日本の臣道」の日本人論を取り上げる。本書は海軍大学校の学生のための講演の筆記録であり、第二次世界大戦中の 1944 年に出版された。学術論文でもない本書を取り上げるのは、前章の「現代日本と町人根性」での思想がより深化しているからである。和辻は、ここで、まず仏教と儒教から軍人精神すなわち武士道の淵源を辿って、武士道は「尊皇の道」として鍛え直す必要があると主張する。そのうえで、彼は、日本の神話を借りて天皇の神聖性を擁護し、「尊皇の道」は「清明心」の道徳だとして「滅私奉公」の態度を要求する。

第 11 章は、津田左右吉の日本人論を取り上げる。津田は和辻と対局的な関係にあり、和辻の日本精神論を理解するうえで欠かせない。まず津田の研究方法を明らかにし、そのうえで和辻の日本精神考と同時期に書かれた「日本精神について」という論文を検討する。津田は、記紀の記述を文字どおりに読むが、歴史的事実とは認めずに、そこから制作者の「意図」や「思想」を読みとろうとする。これに対して、和辻は古事記の偽撰説を否定する。また、日本精神の発現の仕方に関しても、和辻は過去の伝統が現在や未来に現れるとみるのに対して、津田は身近な現代生活そのものが現代精神の現れとみる。このように両者の学術的な相違点をここで明らかにする。

第 12 章は、ベネディクトの日本人論に対する和辻批評を取り上げる。和辻は、『菊と刀』の学問的価値を根本的に認めない。彼は、本書の第 2 章と第 3 章を中心にしてその理由を述べる。すなわち、ベネディクトが局部的な事実を用いて日本人全体の性格を説明していること、日本人の階層制度に対する信仰と信頼を拡大解釈していること、また各標語の取り扱いなどに不備や欠陥が認められることなどが、その理由として挙げられる。ちなみに、和辻の反対論も個人的経験に基づいたもので、同様に学術的とは言えない。

結論は、本論の内容を踏まえて、いくつか問題点を指摘する。まず、第一に、湯浅泰雄の分類による第三期以降も、和辻の日本人論の根底に日本文化論の視点が潜んでいること、第二に、和辻の日本人論は先人の日本人論と共通する部分を多く含むが、「しめやさか」の特性は、和辻によって発見された可能性が高いこと、第三に、「《日本》精神史」から「《日本精神》史」への移行には「転向」よりも抵抗の痕が伺えること、第四に、「間柄」の倫理

と日本精神は、社会的契機だけでなく個人的契機も必要とする点で共通すること、などを指摘する。

付録は、本論の内容に直接には関係しない参考資料である。それは、和辻と同時代の人々の日本精神論、和辻風土論に対する評価、風土の観点からの和辻の中国人論、土居健郎の『「甘え」の構造』の第一章要約からなる。

王 艶玲